

今週の為替相場見通し(2021年6月7日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.33 ~ 110.32	109.54	109.00 ~ 110.50
ユーロ	(ドル)		1.2104 ~ 1.2254	1.2167	1.2050 ~ 1.2300
(1ユーロ=)	(円)		133.15 ~ 134.12	133.26	132.00 ~ 135.00
英ポンド	(ドル)		1.4083 ~ 1.4250	1.4164	1.4050 ~ 1.4250
(1英ポンド=)	(円)	*	154.84 ~ 155.94	155.04	154.00 ~ 156.00
豪ドル	(ドル)		0.7646 ~ 0.7774	0.7742	0.7680 ~ 0.7800
(1豪ドル=)	(円)	*	84.31 ~ 85.19	84.77	84.10 ~ 85.40

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 109.00 ~ 110.50 円

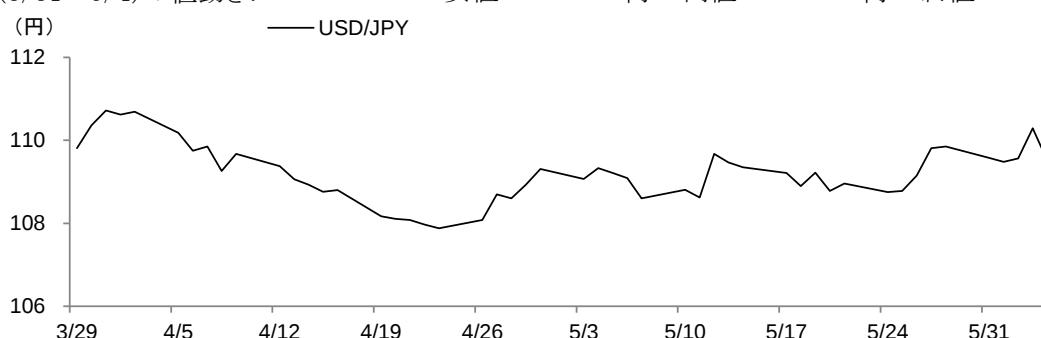
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上に往って来いの展開となった。週初31日、109円台後半でオープンしたドル/円は、欧米市場が休場の中、ドル売りが進み109円台前半まで下落。その後は動意に乏しい展開。1日、仲値にかけてドル売りが進み、一時週安値の109.33円まで下値を切り下げたが、連休明けの海外市場で米長期金利が堅調に推移したことを受け、109円台半ばまで反転した。その後発表された米5月ISM製造業景気指数は予想を超える結果となったが、雇用の項目が悪化したことが嫌気されて、再び109円台前半まで下落。2日、日経平均株価が堅調に推移する中、ドル/円は一時110円に近い水準までじりじりと上昇したが、その後は米金利の低下を受けて109円台半ばまで値を下げる展開に。3日、ドル/円は米金利が堅調に推移する中で109円台後半での値動き。その後は海外時間に発表された米5月ADP雇用統計が予想よりも力強い結果であったことを受けて、110円を突破し一時週高値の110.32円をつけた。4日序盤は、米5月雇用統計を前に動意薄の展開。雇用統計では、失業率や平均時給は市場予想を上回るも、非農業部門雇用者数が市場予想を下回る結果。FRBが量的緩和の縮小を急がないとの見方からドル円は109円台前半まで下落した。終盤にかけては109円台半ばでの動意薄となり同水準で越週している。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。先週の米指標の結果は概ね良好、総じてみればコロナ禍でシュリンクした米経済の着実な持ち直しが確認できる内容だったといえるだろう。しかしながら、一方で非農業部門雇用者数は市場予想を下回る結果となっており、一部マーケットで焦点が当たっていたFRBによる量的緩和観測が後退、米金利は長期債を中心に利回りが低下している状況である。併せてドル売りが優勢な地合いとなっている状況下、今週は転換点となるイベントにも乏しい認識。先週明確に上抜けられなかった110円の水準がレジスタンスラインになるのではないかと考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/31~6/4)の値動き: 安値 109.33 円 高値 110.32 円 終値 109.54 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 1.2050 ~ 1.2300 132.00 ~ 135.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて下落する展開となった。週初31日、1.21台後半でオープン。欧米市場が休場だったため動意のない推移が続いたが、終盤にかけて1.22台前半までじりじりと値を上げた。1日は前日の流れを引き継いで1.22台前半での小動きとなったが、米5月ISM製造業景気指数の結果を受けたドル売りが対ユーロで集中し、直近高値の1.2263を前には抑えられるも一時週高値の1.2254まで上昇。買い一巡後はユーロ/円の下落に連れ安の展開となって1.22台前半まで反落した。2日は欧州時間に1.21台半ばまで値を下げたが、対ポンドでのドル売りがユーロ/ドルにも波及し、1.22台前半まで回復した。3日、1.22台前半で推移していたが米経済指標の良好な結果を受けて、ドル買いが優勢となり一時1.2118をつけ、その後も軟調地合いとなった。4日は、一時週安値の1.2104をつけ、米5月雇用統計が予想比弱めの結果となると米10年債利回りが1.55%台まで低下しドル全面安の展開にユーロ買いの展開。一時1.2186まで上昇を見せた。

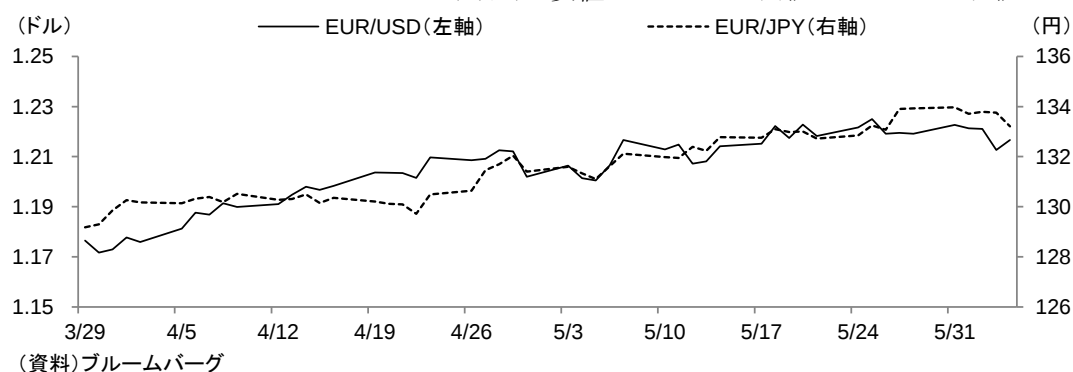
今週のユーロは底堅い展開か。欧州では新型コロナウイルスに対するワクチン接種の進捗もあり行動制限の段階的な緩和が進んでいる。また、先週末の米5月雇用統計が予想比弱めの数字であったことから再度ドル売りも見られている。そのため、基本的にはユーロ買い・ドル売りが優勢となるか。ただし、10日にはECB政策理事会が開催される予定であり結果を待つ展開となることから上値は限定的か。ECB政策理事会ではテーパリングに関する協議に注目したい。直近の経済指標において、ユーロ圏5月消費者物価指数(速報値)は前年比で+2.0%上昇し、ECBのインフレ目標である「2%に近い水準」まで到達している。域内全体でロックダウン措置が取られていた昨年と比べると経済回復に加えエネルギー価格の値上がりもありドイツ・スペイン・イタリアといったユーロ圏内でも経済大国でインフレ率が上昇している。このような環境下、ECB政策理事会ではパンデミック緊急プログラム(PEPP)の購入ペースに関する協議を見極めることとなるか。尚、パンデミック緊急購入プログラム(PEPP)については3月会合にて購入ペースを増加させる意向を示したが、ラガルドECB総裁は正常な購入ペースというものはないと述べており、あくまで物価安定の軌道を取り戻すにあたって、その時点で最適と考えられるペースを3ヶ月に1度決めるに過ぎないという趣旨を強調している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/31~6/4)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2104 高値 1.2254 終値 1.2167

(対円) 安値 133.15 高値 134.12 終値 133.26



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.4050 ~ 1.4250 154.00 ~ 156.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、小動き。対ドルでは小幅に上下動し、週を振り返れば概ね横這い。対円では予想外に軟調気味に推移、対ユーロでは逆に堅調気味の推移を支配的としたものの、値幅はいずれも小幅に止まった。この間、ポンド主導の値動きに見えたのは、1日のポンド全面安ぐらい。実のところ、英現地紙が報じた英中銀ラムズデン副総裁のインフレ警戒発言（「需要(回復)が供給(回復)に先行する」可能性を警戒、「住宅市場動向に注視している」など）を背景に、同日のポンド相場は堅調気味の滑り出しを見せたが、その後発表された英5月製造業PMI確報値の小幅下方修正をきっかけに全面安に転じてしまった。この局面を除くと、ポンドの値動きはほとんどがドルの上下動を反映したものだのように見えた。この間の通貨市場が注目したのは米労働市場動向で、5月の米ADP雇用統計の大幅上振れ（雇用者数増加）にドル全面急騰（3日）、米5月雇用統計の下振れ（非農業部門雇用者数の増加幅が予想に届かなかったことなど）ドル全面急反落を招いた（4日）。ポンドもそれぞれ対ドルで急落、急反発を見せたものの、並行して対円では小幅下押し、対ユーロでは小幅水準切り上げと、方向感の定まらない値動きを見せた。

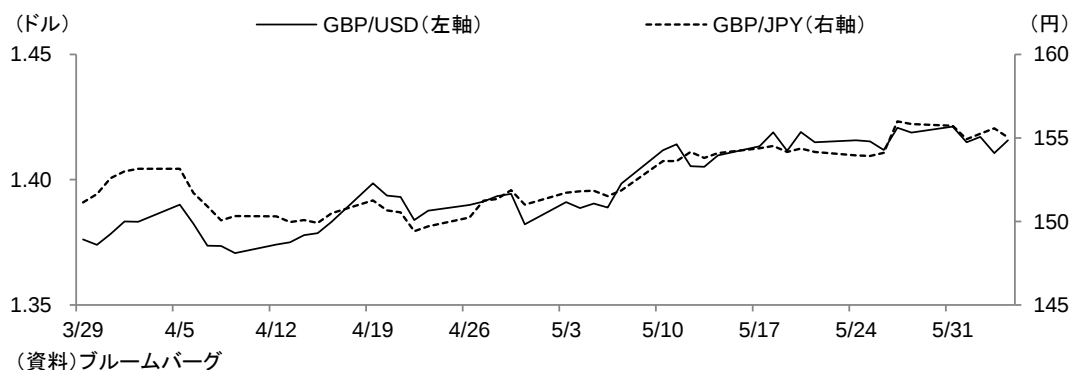
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横這いを予想。先月27日の英中銀金融政策委員会ブリハ委員の「早期利上げ示唆」発言を受け、「少なくとも向こう数週間はポンド堅調」が続く展開を予想したばかりだが、前言撤回、目先の膠着を予想する。仮に、ポンドが英中銀利上げに前のめりに飛びつくような場合にあったのなら、上述、ラムズデン副総裁の発言がほとんど看過されるような展開にはならなかったはずと考えるからだ。また、英5月製造業PMIの小幅下方修正に飛びついてポンドを売っておきながら、2日後（3日）に発表された同サービス業PMIの上方修正に、ポンドが小幅上振れ程度の反応しか示さなかった経緯にも、（英が製造業立国であるよりも、サービス業に依存した経済である事実を鑑みるに）腑に落ちないものを感じた。結論として、要は、ポンドを買いたい圧力が乏しいということになるのではないかと。とりわけ、39か月ぶりの高値を更新したばかりのポンド/円の上値の重さに、ポンド買いの息切れを感じる。一方で、英中銀が、主要国中銀の中でも、早期金融引き締めに積極的な一群に属すると見られている事実にも変化はないわけで、積極的にポンドを売り込むような展開も目先は考え難いのではないかと。英経済指標では、11日（金）に、先月、若干の注目を集めた英月次GDP（4月分）の他、英4月鉱工業・製造業生産、英4月貿易収支などが集中するが、ラムズデン副総裁に敬意を払って、9日（水）の、英王立公認不動産鑑定士協会（RICS）の5月住宅価格指数にも注目しておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（5/31～6/4）の値動き:

(対ドル) 安値 1.4083 高値 1.4250 終値 1.4164

(対円) 安値 154.84 高値 155.94 終値 155.04



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 0.7680 ~ 0.7800 84.10 ~ 85.40 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は週後半に下落するも、米5月雇用統計の結果を受けて反発。週初31日、0.7710近辺でオープン。鉄鉱石価格の回復を背景に小高く推移するも、ロンドンとニューヨークが休場のなかでは値幅が限定的となり、0.77前半での推移に留まる。豪1Q経常収支が予想を上回ったことで一時0.77後半まで上昇するも、RBA理事会にて政策金利の据え置きが発表され、2024年までの政策金利据え置きを示唆したことで反落し、上昇分を消化。0.77半ばでのみみ合いとなる。2日は豪1QGDPの発表を控える中で0.7770手前まで上昇し、結果が予想を上回ったことで週高値の0.7774をつけるが、その後失速して反落。ロンドン時間にユーロ売りの影響でドルが買われ0.7715まで下落するが、米金利の低下に伴い0.7750近辺まで戻す。3日は豪4月貿易収支等の経済指標で堅調な結果が確認されたものの材料視されず。米5月ADP雇用統計や米新規失業保険申請件数が好調な結果であったことから4日発表の米5月雇用統計への期待が高まり、米金利が上昇。それに伴い豪ドルは大きく下落し、週安値の0.7646を付ける。4日は米5月雇用統計の発表を控えて安値水準での推移が続くが、注目された米5月雇用統計は市場予想を下回ったことで急速にドル売りが進行。豪ドルは0.77前半まで上昇し、0.7740近辺での越週となった。

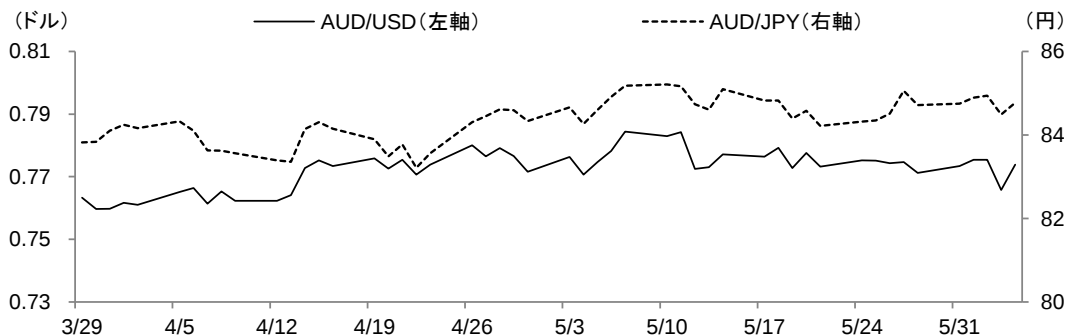
今週の豪ドル相場は上昇する展開を予想する。先週はRBA理事会や重要指標の発表を控えて材料の多い週となった。特に米国でテーパリングの議論がいつ始まるのかは、為替市場で中心的な議題となっている。米雇用統計で堅調な結果が出るとその議論に弾みが出るのだが、5月の結果は期待外れとなり、週を通してじわじわと進んでいたドル買いが巻き戻される形となった。今週は新たな材料となる経済指標の発表は乏しいものの、先週発表された豪1QGDPや豪4月貿易収支等で好調な結果であったことから、豪州での経済回復期待の高まりが豪ドルのサポート材料となる。係ることから、豪ドルは材料難の中でも小じっかりした推移となることを予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/31~6/4)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7646 高値 0.7774 終値 0.7742

(対円) 安値 84.31 高値 85.19 終値 84.77



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。